



鼠径ヘルニア治療に使うメッシュ

ヘルニアという腰の椎間板ヘルニアを思い出す人が多いかもしれませんが、本来ヘルニアとは体の臓器や組織などが本来の場所からはみ出した状態を意味します。

鼠径ヘルニアとは鼠径部（足のつけね）に臓器が脱出して腫れる病気で、成人においては加齢などによって腹壁の組織が弱くなることよって発症します。よく脱腸といわれるように脱出臓器としては腸管が多いのですが、他にも大網（だいもう）という脂肪組織や女性であれば卵巣などが脱出することもあります。症状としては、立ったときやお腹に力を入れたときに鼠径

部（男性では時に陰嚢まで）が腫れ、違和感や痛みを伴うことがあります。この膨らみは横になったり、押し込んだりすることで引込みますが、硬くなつて戻すことができず、嘔吐などの症状も出現することがあります。この場合は嵌頓（かんどん）といって、脱出した腸管が締めつけられて血行障害を来しており、緊急に処置が必要な状態です。

鼠径ヘルニアは薬では治すことができませんので、手術で治療することになります。従来は周囲の筋組織を糸で引っ張りよせて弱くなった組織を補強していましたが、痛みが強いこともあり、近年は写真のようなさまざまなメッシュを用いる手術が主流となつていきます。当院では、鼠径部を直接切つてメッシュを入れる方法と、鼠径部から離れた場所に腹腔鏡や道具を挿入して腹腔内からメッシュを入れる方法で治療を行っています。それぞれに長所・短所がありますが、患者さんの状態を考慮して選択しています。鼠径ヘルニアとなつた場合はご相談ください。

英語教育

町長日記

大阪府教育委員会が、小学一年生から英語の発音とつづりを連動させて学ぶ、指導法の普及を目指すと発表した。世界の学生と英語で渡り合える英語力の育成を目標に掲げている。一見正しいように思われ、もちろん話せないより話せた方がよい。

しかしそれが本当に正しいのだろうか。英語は話すための手段に過ぎない。どう伝えるかより、何を伝えるかの方が重要だと思う。どんなに流暢に英語を話しても内容が伴っていないければ意味がない。英語は伝える手段であり、目的ではない。国際人とは英語を話せる人ではなく、中身のある内容を英語で伝えられる人である。内容が英語に優先される。そんな時間があるなら、子どもにもっと本を読ませ、正しい日本語を身に付けさせるべきだ。

35年前私は、久保田早紀が異邦人という歌で「子ども達が空に向かい両手を上げ」と歌っていることに違和感を覚えた。「子ども」の「ども」は「野郎ども」と同じで複数形である。そこに達をつけることが正しいのか。しかし現代社会では、平気で「子ども達」と使っている。先日ある新聞に「子ども達ら」と載っていた。ここに



田原本町長 寺田 典弘

極まれりという感じがした。日本語がおかしくなつてきている。

私は軽微なこと以外、できるだけ文章での報告を求めている。人の力量を判断するのは、話をさせるより文章を書かせるのが一番早い。その中には奇妙な文章もある。誤字、脱字はかわいい方で、主語と述語が合っていない、一文が長くやたらに形容詞だらけで意味が通らないといった文章もある。最近自分の方が間違っているのではないかと思う時すらある。

斯く言う私も、毎月町長日記で下手な文章を人前にさらしている。町民の皆様は、これまでひた隠しに隠してきた見識の低さを悟られるのではないかとびくびくしている。しかし私には、強く、賢く、やさしく、20年連れ添った古女房がいる。町長日記を書いていると落ち込みそうになる私に、彼女は「大丈夫、誰もあなたの見識や人格が高いと思つていませんから」と励ましてくれる。